

## 「ヨーロッパ市民社会と辺境／マイノリティに関する歴史的研究」 《プラハ・国際ワークショップ》について

篠原 琢

本研究（科学研究費補助金 基盤研究（A））の目的は、文明の「辺境」と「マイノリティ」の生成を、近代ヨーロッパにおける市民社会の形成のメカニズムと関連させながら歴史的に解明することにある。

2006 年度は特に東ヨーロッパの研究者との交流を目的とし、日本およびチェコのプラハにおいて数回の準備研究会を行った後、チェコ共和国科学アカデミー哲学研究所において 2007 年 3 月 22 日国際ワークショップ「市民社会の相対化—チェコと日本の視点から」を開催した。

ワークショップでは、ヨーロッパ近代に形成された歴史像を相対化するための方法論、非ヨーロッパ世界、マイノリティを周縁化する視点を批判的に検討する可能性について論じられた。日本とチェコのそれぞれの「外国史」研究者が出会うという点で稀有な機会であったが、体制移行を経験したチェコ社会・チェコ史学と、日本の研究者との間に共有される論点も多かった。

哲学研究所は、哲学、思想史研究のみならず、思想史と社会史との接点、Intellectual history もまた研究領域としている。受け入れの中心となったウラチミール・ウルバーネク氏は、近世中央ヨーロッパの思想史研究、わけでも宗派化

と人文主義思想の展開を研究対象としており、私たちの研究プロジェクトの協力者として得がたい研究者である。なおウルバーネク氏はプラハ・ワークショップ後、2007 年に招聘教授として東京外国語大学でヨーロッパ近世思想史を講じ、研究交流を行った。

ワークショップは共通言語として英語を使用した。以下、日本語訳で論題を紹介する。

報告は、本研究プロジェクトから、千葉敏之「中世ヨーロッパにおける周縁とマイノリティ：東方殖民の過程におけるマイノリティの創出」、佐々木孝弘「ジェンダーとアメリカ南北戦争」、チェコ側からは、マルケータ・クシージョヴァー「他者との出会い—アメリカへのヨーロッパの拡大：近世におけるユートピアと奴隷制」、イジー・クヴァスニチュカ、「19 世紀後半のチェコ社会における日本イメージ」が発表され、活発な討論が行われた。

報告者の許可を得て、以下に佐々木孝弘氏とマルケータ・クシージョヴァー氏の論考を掲載する。

（しのはら たく・東京外国語大学）